

P63 日本行動分析学会第21回大会 発表論文集
2003年8月4日～5日 岡山大学文学部

いじめ場面における傍観者の行動

Bystander's behavior in bully

(PDゲームにおける敗者に対する傍観者の行動)

Bystander's behavior for the defeated of PD game

○大澤 亮

Ryo Ohsawa

常磐大学人間科学研究科

Graduate School of Human Science, Tokiwa University ; Tokiwa University

森山 哲美

Tetsumi Moriyama

常磐大学人間科学部

本研究では、いじめにおける傍観者の行動を調べるために、PDゲームを用いた実験を行った。この傍観者とは、いじめ問題には直接関わらず、被害者に対する援助行動をしない人である。

本研究では、傍観者の被害者援助行動を促進すると予測される変数の効果を調べるために、2つの実験を行った。実験1では、PDゲームにおける敗者の得点を被験者に見せることで、被験者の敗者への援助行動が促進するかどうか調べた。実験2では、敗者の得点を被験者に見せることに加えて、点数減少に伴って敗者に金銭的負担が課せられるという教示が、被験者の敗者への援助行動を促進するかどうか調べた。この2つの実験の被験者が傍観者ということになる。

実験1

目的

サクラ2名はそれぞれ加害者役、被害者役に分かれPDゲームを行い、被害者役は負け役になる。被害者の点数が減少するのを見ることで、傍観者である被験者の被害者援助行動が増加するかどうか調べる。

方法

被験者とサクラ

T大学2年男子1名、女子2名を被験者（傍観者）とした。また、サクラとして同大学3年男子1名を加害者、同じく2年男子1名を被害者とした。

装置

PDゲームを行うため、アップルマイクロコンピュータ1台を用いた。被験者に、サクラの点数変動を観察させるためのモニターを1台用意した。被験者には加害者援助ボタン、被害者援助ボタン、傍観ボタンの3つが用意された。サクラ2名と被験者が対面しないための仕切りを用いた。

手続き

サクラ2名にPDゲームを行わせた。サクラはそれぞれ加害者、被害者に分かれ、被害者は負け役になった。被験者にはゲームの得点変動を観察させた。また、被験者には次の3つのボタン、加害者援助ボタン、被害者援助ボタン、傍観ボタンが用意された。加害者援助と被害者援助のそれぞれのボタンが押されると、それぞれのサクラの点数が+5点となる。傍観ボタンが押された場合は、加害者も被害者も点数の変動はなかった。実験の手続きは、次の通りである。まず、PDゲームのルールと、実験室内での被験者の役割についての教示を被験者に与え、実験を開始した。加害者と被害者がそれぞれボタンを押した後に傍観者が3つのボタンから1つを選んで押した。ここまでを1試行とし、40試行1セッション、全部で10セッション行った。また、本実験では多層ベースライン法を用いた。最初の数セッションはベースラインとし、被験者間でセッション数が異なった。残りの数セッションを介入とした。ベースラインではサクラ2名の点数が同点になり、介入では被害者が大差をつけて勝った。実験終了後、ボタン

を押した理由について、被験者に尋ねた。

結果と考察

各被験者が各セッションで3つのボタンを押した回数から、それぞれの反応確率を求めた。その結果、被験者3人の被害者援助行動の反応確率は、介入に入っても増加せず、加害者援助ならびに傍観行動の反応確率は減少しなかった。この結果の理由は次の通りである。実験終了後に各被験者が報告したボタンの押し方についての自己ルールが、被害者役の深刻な状況を彼等が受け止めたものでなかった。したがって被験者の自己ルールが、被害者援助行動を増加させるものではないことがわかった。そこで、ボタンを押す際の被験者の自己ルールを、被害者援助行動を増加させるものに変化させる必要がある。よって次の実験では、インストラクションの操作によって、この可能性を検討する。

実験2

目的

実験1と同様、サクラ2名にPDゲームを行わせる。被害者の点数減少を被験者に見せ、点数減少に伴って金銭的負担が被害者に課せられると教示することが、被験者の被害者援助行動を促進するかどうか調べる。

方法

被験者とサクラ

T大学2年男子2名、女子1名を新たに被験者とした。サクラは、実験1と同じ人物であった。

装置

実験1と同じであった。

手続き

点数減少に伴って金銭的負担が被害者に課せられるということを被験者に教示する以外は、実験1の手続きと同じである。なお、この教示は実験開始前に被験者に提示された。

結果と考察

実験の結果、被験者全員の被害者援助行動は、介入に入って増加し、加害者援助行動と傍観行動はほぼ起らなくなってしまった。また、被験者の自己ルールは被害者の深刻な状況を理解したものであった。

以上の結果から、被害者の点数が減少し、被害者の負担が増すという教示が与えられると、被験者の被害者援助行動は増加するといえるだろう。

結論

実験1と実験2の結果から、被害者の点数が減少するだけでは、被害者の被害者援助は増加せず、それに加えて被害者の負担が増すという教示を与えることが、被験者の被害者援助行動を増加させるということがわかった。この教示は、被験者が被害者援助行動を行うことを促進するための自己ルールをつくることに機能したと考えられる。したがって、傍観者に、被害者を援助するための自己ルールの形成をもたらすための教示が、傍観者の援助行動を高めるために必要といえるだろう。